

【論 文】

語り手としての空白

キーワード

歌の文化圏・大伴家・妻と妾・挽歌の意味

大伴家持と妻大嬢は大伴家として望まれた婚姻であり、幸せな関係を維持したとされている。しかしながらそれを証明するのは歌のみである。二人の関係が安定したものとなる時期以前の「二人の空白期」とされる時期に家持は「亡妾」への挽歌を作っているが、この挽歌により万葉集において大嬢との幸せな関係が強調されている。

はじめに

家持と大嬢は、空白期はあるもののそれを超えて幸せな男女としてよりそっていたであろうことが歌によって残されている。言い換えれば万葉集の歌からは二人が幸福な時をすごしたであろうことを理解することになる。大嬢は大伴家の女性として生を受け、やがて大伴家持の妻となる。そして家持からは多くの歌を贈られ、家持が越中赴任後、数年して下向した大嬢は母への歌を家持に「詠へ」ている。万葉集はこのように女性として安定し理想的ともいえる大嬢を歌で描き出すことに成功しているといえるが、こうした大嬢の存在を

浅野 則子

考えるにあたり、万葉集中に記されている二人の関係のみでなく、万葉集中に歌とし残されている「家持の生涯」ともいえるべきものから大嬢に与えられた立場をみることはできないだろうか。家持と大嬢をとりまく歌を読み解くことにより、歌の世界に求められた二人について考えていくのが小稿の目的である。

—

「離絶すること数年にしてまた会ひて相聞往来しき」という細注を持つ家持から大嬢への贈歌が残されている。卷四の七七・八番歌。歌は以下のようなものである。

忘れ草我が下紐に着けたれど醜の醜草言にしありけり

人もなき国もあらぬか我妹子と携ひ行きてたぐひて居らむ

大嬢を忘れることができず、誰からも邪魔されない二人の世界へと行きたいということ伝える歌であり、この歌から二人の関係は幸せに満ちた状態の贈答へと展開していく。この点については、以前論じたことがあるが、ここで確認しておきたいのは、二人が結ばれる歌へと展開する前に二人には「離絶すること数年にしてまた会ひて相聞往来

しき」という時期があり、それを家持が記しているということである。言い換えれば二人は空白期を超えて結ばれたと万葉集には残されているということになる。『離絶すること数年』の時期は明らかではないが、時期としては二人の贈答歌で安定した関係を示すものから考えていくことが可能であろう。母とともに竹田庄にいる大嬢との贈答歌(巻八一 一六二四く六)がその例である。

坂上大嬢の、秋稻の穂縷をもちて大伴宿禰家持に贈りし歌一首  
わがなれる早稲田の穂立ち造りたる縷そ見つつ思はせ我が背

大伴宿禰家持の報贈せし歌一首  
我妹子が業と造れる秋の田の早稲穂の縷見れど飽かぬかも

又、身に著る衣を脱ぎて家持に贈りしに報へし歌一首  
秋風の寒きこのころ下に着む妹が形見とかつも偲はむ

これらの贈答の左註に天平十一年(七三九)秋九月と記されている。大嬢がいるのはこれらの前にある坂上郎女と家持の贈答歌から、母坂上郎女の田庄の竹田庄であることがわかる。この贈答では母の田庄にいる大嬢が作った縷を送り家持がそれに答え、さらに歌はないもの「身につけた衣を脱ぎて」贈りそれに家持が答えていることから二人の安定した関係が明らかである。二人の贈答からは大伴家の中心的な女性である母坂上郎女からも認められている関係となっていることが理解でき、家持の記す「離絶数年」はこれらの歌以前と違ってよいものと思われる。このように万葉集における家持と、大嬢との関係を見る上で、大伴家の中で認められた関係を家持と大嬢が持つこととなった天平十一年という年に家持が他の女性にどのような歌を贈っているかを見ていく必要があるであろう。

前述した大嬢との関係以前に家持に贈られた女性の歌は、制作年代が明らかに示されず、収録されている部立、もしくは前後の歌のありかたから時代を考えるのが通説である。橋本達雄氏は制作年代を伝えていないものの、配列から家持の内舎人時代、天平十一年頃に家持に贈られた女性の歌について「総合してみると家持はいっこうに情熱を示していない」とされる。確かに万葉集中に家持の返歌をみることはできない。そのような歌とは違い、天平十一年に家持が年代を記して歌った女性への「亡妾挽歌」とよばれているものがある。

「亡妾挽歌」は倉持のぶ氏が整理しているようにこれらの歌群では「亡妾」の实在、先行作品の受容、家持の初期の作品としての評価、歌群の構成についてということが従来問題とされている。しかしながら、歌われた時期が万葉集中の「家持の生涯」にとつてどのような意味があるのかという点については明らかにされているとはいえない。歌に歌われた女性が「亡妾」という立場であることから、亡くなった女性が実在したかどうかということが問題となり、もし、「妾」が家持によつて文学的に作り上げたとしても、表現された家持の「心情」のみを理解しようとすることに重点がおかれているためであろう。

「妾」について、小野寺静子氏は「戸令」の中の「不請戸」では「妻」との差別がないとされるが、「妾」という制度があったことは確かであり、並べて表記されていることは、「妻」とは異なった存在であるということになる。万葉集中には「妾」という言葉はこの歌の題詞以外には用いられていない。家持にとつて実際に「妻」とは違う存在の「妾」でしかなかったということから「悲しみ」という心情のみをとらえるのではなく、「妾」を失ったということについてどのように歌ったのかということに焦点を当てて考えていかなければ、家持が作った歌は読み取れないのではないだろうか。たとえ影響をうけたとしても家持は人麻呂の挽歌のように「亡妻」とはせず、律令という制度の中で使われる「妾」という言葉を使ったのである。実体として

「妾」と記される女性が家持の愛情の対象であったということのみではなく、なぜ、律令という制度の中で使われる「妾」という言葉を使ったということから考えることが家持があえて天平十年に歌った意味を考えることになる。歌の表現をみていきたい。

十一年己卯の夏六月、大伴宿祢家持の、亡妾を悲傷して作りし歌一首  
今よりは秋風寒く吹きなむをいかにかひとり長き夜を寝む

三一四六二

歌は「夏六月」に作ったとされる。夏も終わりに近づき翌月「七月」が秋である。秋は風が冷たく吹くという季節観をもとに家持は「吹きなむ」とこれから先の季節を予想するが、それはとりもおさず、共寝をしていた愛しい人を失った自らの身の上と重なるものである。歌でいう「ひとり」は万葉集中では恋人、伴侶のいない「ひとり」であることは通説であるが、歌の表現の上で家持の相手となるのは題詞では「妾」なのである。題詞と関係づけて歌を読む限り、これから迎える秋の長い夜を悲しむのは「妾」であった「愛しい女性」を失ったからということになる。家持の悲しみの歌は自らの「ひとり」を歌うことで亡き人を思う形をとり、女性の姿や二人のかつての様子も描かれていない。家持の一首目からは「妾」が家持の歌の世界でどのような存在であったかはまだ表現されてはいないのである。この歌はどのように展開していくのだろうか。

## 二

弟大伴宿祢書持の即ち和せし歌一首

長き夜をひとりや寝むと君が言へば過ぎにし人の思ほゆらくに

四六三

家持が歌った後「即ち」書持が「和」えている。「草壁皇子挽歌群」のように仕えていた人が亡くなった後に歌を続けて歌う例や「近江朝挽歌群」のように妻達が歌う例、もしくは「追和」という形で挽歌を後に続けて歌う例はあるもの、婚姻関係にある相手、もしくは恋人を失った相手の心を思い自らも亡き人を思つて「和」した例はないといつてよい。弟である書持が妾を失つて「悲傷して」いるのを見て「即ち」作ったという題詞をもつため、書持の心情を読み取るうとする論が多いが、はたしてそれのみでよいのであろうか。表現を見ていこう。家持は妾を失った悲しみを「いかにかひとり長き夜を寝む」とひとり寝によつて表している。その歌に「即ち」和したとする書持は、家持の悲しみの表現「ひとり寝む」をそのまま家持の言葉として歌い、それを受け止めた上で自らも亡くなった妾を思い出すと歌う。この表現によつて亡くなった妾と家持の親しさは書持も十分に知っていることなり、歌の中で二人に共通した妾の姿を描き出すことができるのである。だからこそ、歌の世界で家持の悲しみを書持に共有されたといふべきであろう。歌の世界の上でそれは、兄弟という関係上のつながりのみではない親しい関係であったことを意味するといつてよい。更に、家持の亡妾への思いを受け止め書持がその人を「過ぎにし人」としていうことに注目してもよいのではないだろうか。「過ぎにし人」という表現は、この世から過ぎ去ってしまったという意味にのみとられるが、万葉集中の表現の共通理解として亡くなった人をおのうに歌うことを考えようとする時に参考となるものは、次のような例である。

① ま草刈る荒野にはあれど黄葉の過ぎにし君が形見とそ来し

一一四七

② 百足らず八十隈坂に手向けせば過ぎにし人にけだし逢はむかも

四二七

③ 児らが手を巻向山は常にあれど過ぎにし人に行き巻かめやも

七一―二六八

④ もみち葉の過ぎにし児らと携はり遊びし磯を見れば悲しも

⑤ 潮氣立つ荒磯にはあれど行く水の過ぎにし妹が形見とそ来し

九一―七九六・七

①の歌は軽皇子が狩りのために「安騎の野に宿りましし時」に人麻呂が作った反歌の一首である。今、軽皇子がいる場は「荒野」ではあるがそこに来た目的は、かつて「黄葉のよう過ぎにし君」である軽皇子の父の草壁皇子の形見とすべき「場」であるからだとしている。②の歌は刑部垂麻呂の田口広麻呂への挽歌である。ここでは「過ぎにし人」に逢うためにたくさんの曲がり角がある隅坂に手向けをするという歌。ここでも亡くなった人と歌われる場との関係が歌の中心である。③の歌は「所に就きて思を発せる」三首の歌の一首で、人麻呂歌集のものである。愛しい人の手を「巻く」という名を持つ「巻向山」は変わらずにあるが亡くなった人に逢って手を巻くことではないと歌うが、ここで重要なのは「所に就きて思を発せる」という歌の分類にあるように「巻向山」が亡くなった人を思い出させているということである。④・⑤の二首は「紀伊国にして作れる」と作られた場所が示される挽歌であり、人麻呂歌集のものである。④で「過ぎにし児」とともに遊んだ場である紀伊国の磯は、今その相手を失った悲しみの場となり、⑤では「潮氣たつ荒磯」という本来は好まれる場でないが「過ぎにし妹」の形見だからこそ来ていると歌う。この歌は、日本古典文学全集では人麻呂の①の歌と「形式・詩想共に近い」とされ、伊藤博氏が「人麻呂の体験に基づく詠」とされるように人麻呂の歌との

関係をとらえるべきであろう。このように見ていくと「過ぎにし人」と亡き人を歌う場合は、今歌う場が大きく関わっているということがいえるはずである。また、例としてあげた歌はすべて家持の時代以前のものであった。さらに多くが人麻呂の作もしくは人麻呂歌集のものであるということは、家持周辺の歌の文化圏では「学ぶべき歌」として表現に共通理解を求めていたと考えてよいであろう。

橋本達雄氏は体験を通じた二人の心情を読み取るうとする立場をとるが書持の歌については「家持の自己中心的発想をそのまま承けず、思いを亡妾につなげて広げる」とし、家持は「それに触発されて挽歌制作への意図を抱き、歌想をふくらませてゆく」とされ。家持のこの後に続く挽歌のあり方に大きく力を貸したことを指摘する。書持が家持の歌に「和」えて、亡き「妾」をこのように歌ったのは、歌の共通理解をもとにして、ここから家持が失った女性を「過ぎていった」人として歌の世界でとらえるように家持に答える形をとっているのである。それは、残された者に喪失感を与える場所を示すものであることにより、亡くなった人との「場」を家持にとらえさせようとしたと考えられる。

### 三

さらに続く家持の歌をみていこう。

また、家持の、砌の上の瞿麦の花を見て作りし歌一首  
秋さらば見つつしのへと妹が植ゑしやどのなでしこ咲きにけるかも

移朔して後に、秋風を悲嘆して家持の作りし歌  
うつせみの世は常なしと知るものを秋風寒み偲びつるかも

また家持が作る歌一首

わがやどに 花そ咲きたる そを見れど 心もゆかず はしきやし 妹が  
ありせば 水鴨なす 二人並び居 手折りても 見せましものを うつせみ  
の 借れる身なれば 露霜の 消ぬるがごとく あしひきの 山道をさして  
入日なす 隠りにしかば そこ思ふに 胸こそ痛き 言ひも得ず 名づけ  
も知らず 跡もなき 世の中になれば せむすべもなし

反歌

時はしも何時もあらむを 心痛くい行く 我妹かみどり子を置きて  
出でて行く道知らませば あらかじめ妹を留めむ 関も置かましを  
妹が見しやどに花咲き時は 経ぬ我が泣く涙いまだ 干なくに

悲緒いまだ息まず、また作れる歌五首

かくのみにありけるものを 妹も我れも千歳ごとく頼みたりけり  
家離りいます 我妹を留めかね 山隠しつれ心どもなし  
世の中し常かくのみと かつ知れど痛き心は忍びかねつも  
佐保山にたなびく霞 見るごとに妹を思ひ出で泣かぬ日はなし  
昔こそ外にも見しか 我妹子が奥つ城今愛しき 佐保山

四六四〇四七四

書持の歌を承けて四首目ではなでしこの花の生命力と失われた  
「妾」の命を対比させる。書持の歌から家持は「妾」を具体的に歌う  
ための「場」を表現するがその「場」は「妾」とともにいた「やど」、  
家持のいる家の庭という具体的な歌の「場」となって表現される。次  
の歌では「朔移りて後」、秋となって季節とともに感じ取られる悲し  
みを歌う。それは「朔移りて後に、秋風を悲嘆して」と題詞に記すよう  
に一首目で想像された悲しい世界を「秋風」で実感していたと歌った  
ものである。時間の流れは家持の歌の中では悲しみを増幅させる

ものとなっていく。ここでは感じ取る風の冷たさは観念的な「常」  
なき世を今、悲しみという感情へと向かわせることで身を以て理解  
していると歌うことになる。なでしこが咲く「やど」という悲しみの  
場はさらに長歌へと展開していく。

長歌では悲しみの場である「なでしこが咲いている庭」から歌い  
始める。そしてあえて「二人」と歌い、今は失った世界を表現する  
ことにより、前の歌で「世は常なし」という悲嘆を承けつる。さらに  
「常」ではないのは命そのものであるとするために「うつせみの借れる  
身なれば露霜の消えぬるがごとく」と具体的な死の表現へと続いて  
いく。この長歌における喪失感の表現の上では既に指摘される  
ように先行の表現の影響のもとにあるが、この長歌では、新しい観念  
である「仏教的無常観」と人麻呂から続く「他界した妻」への思いを  
同時に歌い、観念ではない「死」を表現しているとともに、あえて歌の  
共通理解によって愛しい女性を失ったことを歌ったのではないだろう  
か。こうした表現により「妾」は歌の世界では失われた愛しい女性  
そのものとなっていくのである。

この長歌には反歌が三首つけられている。先の長歌に人麻呂の影響  
がみられたが、ここでも一首目の「時はしも何時もあらむを」二首目  
の「出でていく道しらせば ならかじめ妹を留めむ 塞きも置かまし  
を」と人麻呂の「亡妻挽歌」の表現が用いられる。このように人麻呂  
の「亡妻挽歌」へと導いたのは、共通理解として人麻呂もしくは人麻呂  
歌集の歌の表現を書持が示したからに他ならない。「反歌一首目の  
「みどり子」の事実関係が論じられるが、これも人麻呂の「亡妻挽歌」の  
影響といえよう。家持の歌の展開において、たとえ実体として子供が  
いたとしても、このような歌の配列のなかであえて歌うことに意味を  
求めねばならない。「みどり子」こそは「妾」と家持の家族としての  
満ち足りた生活の象徴するといえるのではないだろうか。それは、この  
歌以外、直接的に家持が「子供」を歌わないことから知られることが

できよう。満ち足り二人の世界を具体的に歌うことで喪失感が強まるのである。そして二首目では「出でて行く道知らませば」と挽歌の伝統である「他界した妻」を歌い、長歌で具体的に歌われた自分がいる「場」に相手がいないことを繰り返している。三首目の「我が泣く涙いまだ干なくに」が憶良の「日本挽歌」の影響が見られることは通説となつているが、憶良が「妹が見し棟の花は散りぬべし我が泣く涙いまだ干なくに(五―七九八)」で「妹が見た」花が散ることを歌い、時間が経過しても続く悲しみを歌うことに対して家持の歌では「妹が見」たのは「やど」でしかなく、そこに咲く花は亡き人とは共有して<sup>註</sup>いないと歌うことでさらに悲しみを深く歌う意図がみられる。

家持は「悲緒未だ息ず、更に作りし歌五首」としてこの挽歌を歌い納める。悲しみはまだ歌い継がれるのである。「また作れる」として歌には何を表現しようとしているのだろうか。まず一首目で愛しい人は「かくのみにありける」とすでに「死」を受け入れることから歌い始める。かつて「千年のごとく」頼っていたことは過去のことではない。二首目では他界の表現をとりつつ今はもういいことを強調するが、相手の死が自らの心をうつろにしたというように自らを見つめる表現もあらわれてくるのである。それは三首目で「かくのみとかつ知れど」と観念的には知つたことが悲しみという感情となつて我が身を襲っているというように、愛しい相手を歌うことから自らへと目をむけるという展開となつていく。さらに最後の二首では火葬の煙、墓所を歌うこととなる。長歌とその反歌で歌われた「場」はかつてともにいた「やど」であつた。それは生きていた「妾」がいた場所でもあつたはずであるが「悲緒いまだ息まず、また作れる歌五首」において、歌の場として現れるのは「佐保山」であり、それは「亡くなつた」相手を葬つた場所としてのみ存在しているのである。この二首の歌にはもう愛しい女性性は存在せず、墓所を代わりに愛しく思うという形で終わりを迎えている。

天平十一年の六月から七月に作られた「亡妾挽歌」と呼ばれる一群の歌は家持には「妾」がいて、その女性性は弟書持も知ることとなつていたが、すでに亡くなつてしまつたという「妾」の存在を確認したもではなかつたのだろうか。その後九月に大嬢と贈答を交わした時の家持には、ただ「妻」としての大嬢のみが存在していたことを万葉集の歌の世界では記したといえるだろう。

### おわりに

家持の歌の年代から考えるとこれらの歌の間は大嬢との間が疎遠になつていた時期である。歌の世界における家持の位置づけに関わるのがこの挽歌群であり。大嬢との安定した関係の前に置かれていることがこの挽歌群の存在の意味であるといつてもよい。「亡妾挽歌群」において家持は「妾」をすべて「妹」・「我妹(子)」と呼んでいる。家持にとつてこの時の一対の相手は歌われる「妾」に他ならない。記された時期から確実にわかる一対の相手はこの「妾」ひとりであり、しかもしかもそれは、弟にも知られていた相手であつた。家持が相手を「妹」、「我妹(子)」と具体的に歌うのは、制度上認められていた存在の女性への思いを描くことでもあつた。

家持が書持の歌を受ける事によって作り出された歌の世界で家持は、今と過去をつなぎ、はじめて失つた「妾」という存在を描き出したが、それは、亡くなつていくということが前提であつといえよう。万葉集では、天平十一年の秋の初めに家持は「妾」の死を歌として表現した。制度上では「妻」と並ぶ女性はないことをこれらの挽歌群は示しているのである。そして、その後はただ「妻」大嬢への思いを歌い上げる。大嬢の嫉妬の歌は残されていない。万葉集ではこうして家持と大嬢の幸せな関係を歌によって記しているといえるのではないだろうか。

① 註

万葉集ではこの後巻四一七二九〜三一の大嬢の歌、七三二〜四の家持の歌の贈答、さらには七三五・六の大嬢、家持の贈答、七三七・八の大嬢と七三九・七四〇の家持の贈答という細やかな関係を記した後、家持から大嬢への十五首の贈歌（七四一〜七五五）で締めくくっている

② 「想定された至福―大伴坂上郎女の歌をめぐって―」『別府大学紀要』第四十号

③ これらの歌の前の坂上郎女と家持の贈答は次のようなものである。

大伴家持の、姑坂上郎女の竹田庄に至りて作りし歌一首  
玉梓の道は遠けどはしきやし妹をあひ見に出でてそあが来し

大伴坂上郎女の和せし歌一首

あらたまの月立つまでに来まさねば夢に見えつつ思ひぞあがせ

④ 橋本達雄氏は、歌の収められている巻の配列年代から次のように推定される。

笠女郎・山口女王・大神女郎 天平四、五年頃

中臣女郎 天平五、六年以降

河内百枝娘子 天平八年以前か

巫部麻蘇娘子 天平八年〜十一年九月頃

日置長枝娘子 天平八年頃

粟田女娘子 天平八年以降

⑤ 註④の論文に同じ。「亡妾を悲傷する歌」『大伴家持作品論攷』塙書房

⑥ 倉持しのぶ氏「亡妾を悲傷しびて作る歌」『セミナー万葉の歌人と作品』和泉書院

⑦ 「日本古典文学全集」の題詞の頭注では「後年の妻坂上大嬢にはば

かったからであらう」とする。

⑧ 倉持しのぶ氏註⑥に詳しい

⑨ 小野寺静子氏「亡妾を悲傷する歌」『家持と恋歌』塙選書

⑩ 「泣血哀慟歌」巻二一〇七〜二二六（或る本の歌も含む）

⑪ 主人をなくした舍人たちが歌ったものとして「草壁皇子挽歌群」

（巻二一七〜一九三）・妻たちが歌ったものとしては天智への

「近江朝挽歌群」（巻二一四七〜一五五）・追和としては有間皇子

の自傷歌（巻二一四一・二）に追和した憶良の歌（一四五）が

ある。

⑫ 人麻呂の歌及び人麻呂歌集が書持以前であることは明らかである

が②の作者刑部垂麻呂は伝未詳であるものの④の歌を悲しんだ

田口広麻呂が慶雲二年に従六位上から従五位下となっていること

から書持より前の作であることがわかる。

⑬ 『日本古典文学全集』一七九七番歌の頭注 小学館

⑭ 伊藤博氏『萬葉集積註』一七九七挽歌の積文 集英社

⑮ 註④に同じ。

⑯ 註⑩の歌に同じ。

⑰ 伊藤博氏は家持は、憶良のこの歌の後の七九九挽歌で「心の嘆き

が大伴家持の挽歌群では「悲緒いまだ息まず、また作れる歌五首」

がそれにあたりとされる。伊藤博氏『萬葉集積註』

歌の本文は『新日本古典文学大系』（岩波書店）による